



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

中学校社会科地理における基本的な地理的見方・考  
え方の修得実態：  
大学生を対象とした簡易的調査より（フォーラム）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牛垣,雄矢 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159232">http://hdl.handle.net/2309/159232</a>

# 中学校社会科地理における基本的な地理的見方・考え方の修得実態 —大学生を対象とした簡易的調査より—

牛垣 雄矢\*

キーワード：地理的見方・考え方, 暖流, 寒流, 内陸性気候, 関東ローム

## I 問題の所在と調査の目的

平成29年に改訂された中学校学習指導要領では、各教科の「見方・考え方」<sup>1)</sup>が重視される内容になったが、地理では以前からこれが重視されてきた。そのため各大学の入学試験や大学入試センター試験においても、単なる知識を問うのではなく、地理的見方・考え方をを用いて解く問題が比較的多く出題されてきたように思える。例えばそれは、地理教育関連の学会による大学入試センター試験に対する評価からも読み取ることができる<sup>2)</sup>。

暗記科目と認識されやすい社会科系科目の中で、地理は比較的考えて問題を解くことができ、この点が地理の面白さの一つといえるが、そのような地理的見方・考え方が修得できているか否かは、それが修得できるような授業を受けてきたかどうかにかかっている。中学校社会科の地理学習はこれまでも必修であったため、その重要な役割を担ってきた。

中学校の社会科教員には、大学時代に学んだ専門や大学受験で選択した科目が歴史や公民系科目である場合も多く、自然地理のように自然科学的分野に対する知識や理解が要される地理については、苦手意識をもつ教員も多いといわれる。自身が十分に地理的見方・考え方を修得

できていない社会科教員が行う地理の授業は、地理的見方・考え方をを用いて現象の背景を理解することなく、単に暗記させて答えを導き出すような授業が展開されてしまう可能性もある。高等学校時代に日本史を選択し、大学入試も日本史Bで受験をした著者は、教科書や資料集の内容を片っ端から覚えるように勉強してきたが、地理が苦手な中学社会科教員が、そのような方法で地理の授業を行っている可能性もある。大高(2018)は、勤務校において教科書の本文を読み取らせるだけの模擬授業を展開する学生が多く、「唯言語主義的社会科教育・地理教育ともいべき教育方法の横行は、彼らがこのような授業を受けてきた証左と考えたくはないが、教育実習先においてこうした教育方法を指導されることもあるようだ。」(p.101)と指摘している。

このような地理の授業を受けた学生は、ごく基本的な地理的見方・考え方も修得できないばかりか、地理はひたすら暗記でつまらない科目と認識し、地理嫌いになってしまう場合も多いように思える。そこで本稿では、中学校社会科地理における基本的な地理的見方・考え方の修得実態を把握するために、大学生に対して簡易的な調査を行い、その結果を示す<sup>3)</sup>。

調査は、ごく基本的な地理的見方・考え方の

\* 東京学芸大学教育学部

※ 解答中、私語やスマホは厳禁です

問1 下の文中の□に適切な語句を記入せよ。

- ・ 東京などの大都市の中心部は、郊外に対して□①人口が多い。
- ・ 関東平野には、赤土（関東□②）におおわれた台地や、利根川等の川沿いにできた低地が広がる。

解答欄 ① \_\_\_\_\_ ② \_\_\_\_\_

問2 下の図中の□に適切な語句を記入せよ。

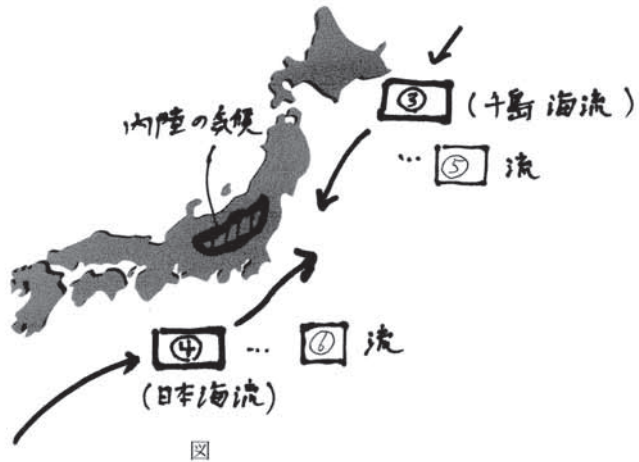
解答欄

③ 名称: \_\_\_\_\_

④ 名称: \_\_\_\_\_

⑤ 暖か 寒  
⑥ 暖か 寒

（いふれかに  
〇をつけよ）



図

問3 上の図中の「内陸の気候」の特徴を説明した下の文章が正しい場合は正に、間違っている場合は誤に○をつけよ。

- ・ 上の図中の「内陸の気候」の地域は、1年を通して降水量が多い。 正 ・ 誤

問4 日本の自然災害に関する下の説明について、それぞれ正しい場合は正に、間違っている場合は誤に○をつけよ。

- ・ 地震によって発生する津波から身を守るために、日本の沿岸部の近くでは、津波避難タワーの設置が進められている。 正 ・ 誤
- ・ 過去の記録を参考にすると、富士山の噴火で噴出する火山灰は、東京都内へ到達する可能性は低いと考えられている。 正 ・ 誤

裏へ続く

第1表 本調査における問の内容と出題意図

	内容	出題意図
問1	関東平野には、赤土（関東 ）におおわれた台地や、利根川等の川沿いにできた低地が広がる。	下記の間4を参照。
問2	図中の海流の方向を見て、親潮と黒潮がそれぞれ寒流か暖流かを問う。	暖かい赤道方面からくる黒潮は暖流、寒い北極方面からくる親潮は寒流、ということを理解しているかを問う。
問3	日本の「内陸の気候」の地域が年間を通して降水量が多いか少ないかを問う。	海から離れた地域は湿度が低く雨が降りにくいことを理解しているかを問う。
問4	過去の記録を参考にすると、富士山の噴火で噴出する火山灰は、東京都内へ到達する可能性は低いと考えられている（正・誤）。	関東ロームは富士山などの火山灰であり、かつて富士山の火山灰が関東へ到達した証であることを理解しているかを問う。

第2表 本調査における質問の内容と選択肢

	内容	選択肢
Q1	高校時代、「地理」を履修しましたか。下の①～⑤のいずれかを選んでください。	①「地理A」を履修 ②「地理B」を履修 ③「地理A」「地理B」を共に履修 ④AかBが不明だが、「地理」は履修した ⑤「地理」は未履修
Q2	大学入試を「地理」で受験しましたか。下の①・②のいずれかを選んでください。（各大学の一般入試やセンター試験を含む）	①「地理」で受験した ②「地理」では受験していない
Q3	中学時代、「地理」は好きでしたか。下の①～⑤のいずれかを選んでください。	①すごく好きだった ②やや好きだった ③普通 ④やや嫌いだった ⑤すごく嫌いだった
Q4	中学時代、「地理」は得意でしたか。下の①～⑤のいずれかを選んでください。	①すごく得意だった ②やや得意だった ③普通 ④やや苦手だった ⑤すごく苦手だった
Q5	中学時代、「地理」の授業で地図帳は使いましたか。下の①～③のいずれかを選んで下さい。	①使った ②使った覚えはない ③覚えていない

修得実態を把握するための問（第1図、第1表）と、高等学校における地理履修の有無や中学校地理の好き嫌いなどに関するアンケート（第2表）からなる。調査はいずれも大学生を対象とした。国立の教員養成系大学では、初等教

育社会選修・中等教育社会専攻所属の地理学分野学生が参加する「都市地理ゼミ」（3・4年、院生）、主に社会選修・社会専攻の学生が受講する「地誌学概論」（主に2年）、社会科以外の選修・専攻の学生が受講する「社会科研究」

第3表 本調査の概要

(単位：人)

授業名	大学・学部	年次	授業の特徴	調査対象 学生	全問正解	誤答 解答有
地誌学概論	国立大・教員養成系	2	中等社会免許必修	74	59	15
社会科研究	国立大・教員養成系	2	初等必修	117	82	35
都市地理ゼミ	国立大・教員養成系	-	自主ゼミ	12	12	0
地理学の現在	私大・生物資源系	1	一般教養	212	105	107
地理学概論Ⅱ	私大・生物資源系	3	中等社会必修	6	3	3
商業地理学	私大・理学系	2	学科選択必修	42	37	5
合計				463	298	165

全問正解と誤答回答は、本調査の分析対象である問1②、問2⑤・⑥、問3、問4下段の値。  
2019年11月と12月に各授業で実施した調査により作成。

(主に2年)において実施した。また、私立の理学系学部で主に地理学科の学生が受講する「商業地理学」(主に2年)、私立の生物資源科学系学部の一般教養科目で様々な学科の学生が受講する「地理学の現在」(主に1年)と国際地域開発学科の学生が受講する教職科目「地理学概論Ⅱ」(3年)において同様の調査を実施した(第3表)。

## Ⅱ 各問における出題の意図

調査における質問項目は、問1が人口と地形に関する文章穴埋め、問2が海流名の穴埋めと暖流・寒流の選択、問3が内陸性気候の特徴に関する文章正誤選択、問4が日本の自然災害に関する文章正誤選択とした。このうち、問1①(「昼間」が正解)、問2③(「親潮」が正解)・④(「黒潮」が正解)、問4上段(「正」が正解)は、基本的な地理的見方・考え方の修得実態を把握する今回の調査としては対象外であり、ダミー的な問である。そのほかの問の意図は以下の通りである(第1表)。

問2は、日本の太平洋側を流れる海流のう

ち、北東から南西へ流れる海流と、南西から北東へ流れる海流について、それぞれ暖流か寒流かを問うている。地球をイメージすると、北半球に位置する日本では、赤道があり暖かい方向から流れてくる海流は暖流であり、北極があり寒い方向から流れてくる海流は寒流である。このように地球をイメージして考えれば、あとは北極は日本の北に位置して寒く、赤道は日本の南に位置して暖かいというごく基本的な知識があり、海流がそれらの影響を受けていることを理解していれば簡単に解け、かつ何十年後に同様の問題が出されても間違えることはないであろう。しかし、もし第1図の問題用紙のように、地球をイメージすることなく、単に海流名と合わせて暖流か寒流かを穴埋めして覚えた生徒にとっては、それを忘れてしまえば正解が導き出せなくなってしまう。著者としては、現実にもそのような生徒もいるのではないかという思いがあり、この問を設けた。この問の不正解者は、教師が説明していないか本人が聞いていなかったかは不明だが、少なくとも地球をイメージする上記の説明は聞いていないと考えられる。

問3は、本州の長野県から福島県にかけての

第4表 各問における不正解の割合

授業名	大学・学部						(単位：%)
		問1②	問2⑤⑥	問3	問4下段	問1②正解かつ 問4下段不正解	
地誌学概論	国立大・教員養成系	0	5.4	14.9	1.4	1.4	
社会科研究	国立大・教員養成系	3.4	6	23.9	2.6	2.6	
都市地理ゼミ	国立大・教員養成系	0	0	0	0	0	
地理学の現在	私大・生物資源系	30.7	11.3	42.9	8.0	6.1	
地理学概論Ⅱ	私大・生物資源系	33.3	0	33.3	16.7	0	
商業地理学	私大・理学系	4.8	4.8	9.5	4.8	2.5	
合計		18.7	8.7	30.0	5.5	3.6	

2019年11月と12月に各授業で実施した調査により作成。

地域に広がる内陸性気候の特徴として、1年を通して降水量が多いか少ないかを問うている。空気中の水分濃度を意味する湿度は、海に近い地域よりも海から離れた地域の方が低いため、内陸では雨が降りにくい、ということは比較的単純な話であり、一度聞けば忘れないと考えられる。もちろん、降水のメカニズムにはもう少し説明が必要で、日射によって地表近くの空気が温められると水蒸気を発生させて上昇気流を起し、雲を作って雨を降らせるという説明が必要になるであろう。また日本の内陸性気候の降水量は、海からの距離だけでなく季節風との関係が強く関わるであろう。しかし世界の気候を考えても、内陸部は沿岸部と比べて降水量が少ないことは基本的な地理的見方・考え方であり、ここではその理解を問うた。

問4の下段の問は、富士山が噴火した場合に、その火山灰が東京へ到達する危険性があるか否かを問うているが、これは問1②「関東ローム」の正解者が、関東ロームを富士山などの火山灰が堆積したものと理解しているかを見ている。ステレオタイプ的に「関東の土＝関東ローム」とは覚えていても、関東ロームが何なのかを理解しているか、関東ロームで覆われて

いることがかつて富士山の火山灰が東京へ到達した証であることを理解しているかを問うた。

### Ⅲ 調査結果

日本列島東岸を流れる海流が寒流か暖流かを問う問2は、不正解の割合は全体で8.7%である(第4表)。教員養成系国立大学の各授業や理学系私立大学「商業地理学」では、不正解者は5%前後であるが、生物資源系私立大学では11.3%と1割を超えている。Ⅱで示した通り、問2はごく基本的な地理的見方に関する問であるが、これさえも理解していない学生が一定程度存在する。なお、生物資源系私立大学「地理学概論Ⅱ」の不正解率が0%なのは、この調査の前の週に同様の内容を説明した影響と考えられるため、ここでは考察対象から除外する。

問2の不正解者37名のうち、高校時代に地理を履修した学生が18名、大学入試で地理を選択した学生が7名、中学校時代に地理が好きだった学生が13名、中学校時代に地理が得意だった学生が8名存在する(第5表)。大学入試で地理を選択したにも関わらず、問2のようなごく基本的な地理的見方を修得していない学生が7名



第5表 各問の不正解者と中学・高等学校の地理との関係

(単位：人)

授業名	大学・学部	総数	高校地理 履修者	大学入試 地理選択	中学地 理好き	中学地 理得意	中学地図 帳使用
問2 暖流・寒流の方向に関する問							
地誌学概論	国立大・教員養成系	4	2	0	2	0	3
社会科研究	国立大・教員養成系	7	3	2	2	2	7
都市地理ゼミ	国立大・教員養成系	0	0	0	0	0	0
地理学の現在	私大・生物資源系	24	12	3	7	4	20
地理学概論Ⅱ	私大・生物資源系	0	0	0	0	0	0
商業地理学	私大・理学系	2	1	2	2	2	2
合計		37	18	7	13	8	32
問3 内陸気候の降水量に関する問							
地誌学概論	国立大・教員養成系	11	7	0	4	6	10
社会科研究	国立大・教員養成系	28	10	3	11	8	25
都市地理ゼミ	国立大・教員養成系	0	0	0	0	0	0
地理学の現在	私大・生物資源系	91	43	6	26	18	80
地理学概論Ⅱ	私大・生物資源系	2	0	0	1	1	2
商業地理学	私大・理学系	4	2	2	2	1	4
合計		136	62	11	44	34	121
問4 関東ロームと富士山の火山灰に関する問							
地誌学概論	国立大・教員養成系	1	0	0	1	1	1
社会科研究	国立大・教員養成系	3	2	1	2	2	3
都市地理ゼミ	国立大・教員養成系	0	0	0	0	0	0
地理学の現在	私大・生物資源系	9	4	1	3	3	5
地理学概論Ⅱ	私大・生物資源系	0	0	0	0	0	0
商業地理学	私大・理学系	1	1	1	0	0	1
合計		14	7	3	6	6	10

2019年11月と12月に各授業で実施した調査により作成。

おり、教員養成系国立大学の学生も2名存在する。また中学時代に地理が好きだった学生や得意だったという学生も一定程度存在している。「暗記の地理」の授業を受けながらも地理が得意であったり好きであった学生、言い換えれば「暗記の地理」が好きで得意だったという学生も、一定程度存在するとも考えられる。そのような学生も、もし地理的見方・考え方が修得で

きるような授業を受けていれば、より地理が好きで得意になった可能性が高いであろう。

日本の内陸性気候の地域において降水量が多いか少ないかを問う問3では、全体として不正解の割合が30.0%と非常に高く(第4表)、内陸部では雨が降りづらいことは理解されていない。教員養成系国立大学の社会選修・専攻の学生が主である「地誌学概論」では14.9%、社会

選修・専攻以外の学生が主である「社会科研究」では23.9%が不正解であり、文章正誤選択で2択の間であることを踏まえると、かなり高いといえる。生物資源系私立大学の「地理学の現在」では42.9%が不正解であり、ほぼ理解されていない。その中で理学系私立大学「商業地理学」では9.5%と不正解率がかなり低いが、これは中学・高等学校までの学びの違いというよりは、大学2年次前期必修科目に「気候学」があるなど、大学教育の影響と考える。

問3の不正解者136名のうち、高校時代に地理を履修した学生が62名、大学入試で地理を選択した学生が11名、中学校時代に地理が好きだった学生が44名、中学校時代に地理が得意だった学生が34名存在する（第5表）。この間の不正解者の多さの割には、大学入試で地理を選択していた学生の数が少ないことから、内陸部で降水量が少ないことは、受験生レベルでは常識的な考え方といえるかもしれない。

問1①で「関東ローム」と正解しながら、問4で富士山が噴火した際に火山灰が東京へ到達する可能性が低いと考えた学生は、全体としては3.6%であった（第4表）。授業別に見ると、教員養成系国立大学「地誌学概論」では1.4%、同「社会科研究」では2.6%、生物資源系私立大学「地理学の現在」では6.1%、理学系私立大学「商業地理学」では2.5%であった。高い数値とは言えないが、これは関東ロームが富士山の火山灰を含むことを理解できていないことが確定している学生の割合である。問4が文章正誤を選択する2択の間であり、これに偶然正解した学生も一定程度存在すると考えると、この数値以上に理解できていない学生はいるであろう。「関東ローム」という用語を暗記するだけで、それが何なのか、それがなぜ堆積しているのかを理解していなければ、生きた知識にはならないであろう。

これに該当する14名のうち、高校時代に地理を履修した学生が7名、大学入試で地理を選択した学生が3名、中学校時代に地理が好きだった学生が6名、中学校時代に地理が得意だった学生が6名存在する（第5表）。関東ロームは富士山などの火山灰であることは基本的な知識であるが、これを理解していない学生がわずかながらも存在し、大学入試での地理の選択者も3名、うち教員養成系国立大学の学生も1名存在する。大学入試として地理を選択している生徒の中でも、現象の内容をしっかりと理解せず、単に「関東の土＝関東ローム」というように、用語等の暗記を中心とした学習が行われている可能性もある。

#### Ⅳ おわりに

本稿では、中学校社会科地理におけるごく基本的な地理的見方・考え方の修得実態を把握するために、大学生に対して簡易なアンケート調査を行い、その結果を示した。これによりごく基本的な地理的見方・考え方であっても、修得できていない学生が一定程度存在し、その中には大学受験で地理を選択した学生や、中学校時代に地理が好きであったり得意であった学生も存在することが分かった。ここで出題した問が、一度説明を聞いたら忘れないような単純な理解を問う内容であるため、今回の不正解者は、これらの問に関する説明を授業の中で聞いていない可能性が高い。改訂された学習指導要領では、これまで以上に各教科の見方・考え方が重視されるが、基本的な地理的見方・考え方を十分に修得できていない教員も存在し、それを教授するような授業も行われていない場合も多いと考えられ、地理教育の課題といえる。

本調査は2019年11月から12月にかけて実施さ



せていただきました。ご協力いただいた学生の皆様に厚くお礼申し上げます。

## 注

- 1) 地理的な見方・考え方の具体的な内容として、最新の学習指導要領については井田(2018)が、平成20年度版以前の内容については吉田(2008)がそれぞれ解説している。本稿で行った調査で把握した地理的見方や考え方は、学習指導要領で示されたそれよりも、さらに基本的な見方・考え方と位置づけられる。
- 2) 大学入試センター試験のホームページや、日本地理教育学会の評価については同学会誌『新地理』の1号に毎年掲載されている。
- 3) 関連する成果として、竹内(2009)は「見方・考え方」による地理学習を経験した大学生を対象としたアンケート調査を行い、これを構成原理とするカリキュラムの学習実態を明らかにした。竹内の研究では、主に身近な地域調査学習の効果等について考察しているが、本稿ではごく基本的な地理

的見方・考え方そのものが修得できているかを明らかにする。

## 参考文献

- 井田仁康(2018): 地理教育における地理的な見方・考え方の重要性—学習指導要領における位置づけ—. 江口勇治監修・編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』帝国書院, pp.76-83.
- 大高 皇(2018): ドイツ地理教育と日本の地理教育の比較—地理的な見方・考え方の観点から—. 江口勇治監修・編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』帝国書院, pp.94-103.
- 竹内裕一(2009): 地理的見方・考え方, 地理的技能を構成原理とする地理カリキュラムの評価—大学生の中学校地理的分野の学習体系に関する実態調査をもとに—. 千葉大学教育学部研究紀要, 57, pp.65-77.
- 吉田 剛(2008): 中学校学習指導要領社会における地理的見方・考え方の潮流. 宮城教育大学紀要, 43, pp.43-59.

## Learning Status of Basic Geographical Perspective of Junior High School Social Studies — Questionnaire Survey for University Students —

USHIGAKI Yuya \*

Keywords : geographical perspective, warm current, cold current, inland climate area, Kanto Loam

\*Department of Geography, Tokyo Gakugei University